

史料紹介

古宇田 亮 修

当研究所では、平成一七年度（二〇〇五）より社会福祉法人錦華学院に所蔵される東京感化院時代の史料の翻刻公開を開始した。本号はその一二冊目に当たる。過去一一冊においては、第七号を除き明治期の日誌史料を中心として翻刻を掲載してきた。本号もまた、明治四三年と翌四四年の東京感化院の日誌類二冊の翻刻を掲載するものである。

本号の翻刻作業については、従来通り北都古文書研究会（会長齋藤博氏）の全面的な御協力を仰いだ。ここに記して心より御礼申し上げる次第である。なお本号の編集・版下作成は、筆者の担当になるものである。

〈史料62〉日誌 家族（明治四十三年）

当史料は、一二行書きの野紙で全二七七丁から成る和綴じ本であり、二七五丁目まで記載がある。記載期間は、明治四三年元日から大晦日までの一年分である。史料の状態は、末尾の十数丁にわずかな虫損が見られるほかは良好である。なお〈史料61〉『日誌』（明治四十三年度）と記載期間が重なるため、相互に参照することが可能

である。主な記載者は一名であり、現在のところ未確定であるが、〈史料60〉『日誌 家族』（明治四十二年）の記載者と同一人物の可能性が疑われる。

内容としては、表題からも分かるように家族寮に関する日誌であり、〈史料60〉の後継に当るものと考えられる。また、一日当りの記載量についても、〈史料60〉と同じく充実している。

〈史料63〉日誌（明治四十四年）

当史料は、一二行書きの野紙で全八九丁から成る和綴じ本であり、最後の丁まで記載がある。表紙には虫損が多く見られるが、本文には判読に影響するほどの虫損は存在しない。記載期間は、明治四四年元日から同年一月一日までと一二月二五日、一二月二日の両日である。同時期の日誌としては、〈史料64〉『日誌 家族寮』（明治四十四年一月起）（『東京感化院関係史料集(13)』収録予定）があり、相互に参照することが可能である。記載者は、その筆跡から数名が関わっていると考えられるが、詳細は未確定である。

内容としては、庶務課の日誌と考えられ、〈史料61〉『日誌』（明治四十三年度）の後継に当るものと考えられる。一日当りの記載量は〈史料62〉と比べても、かなり簡潔であるといえる。

（当研究所主任研究員）